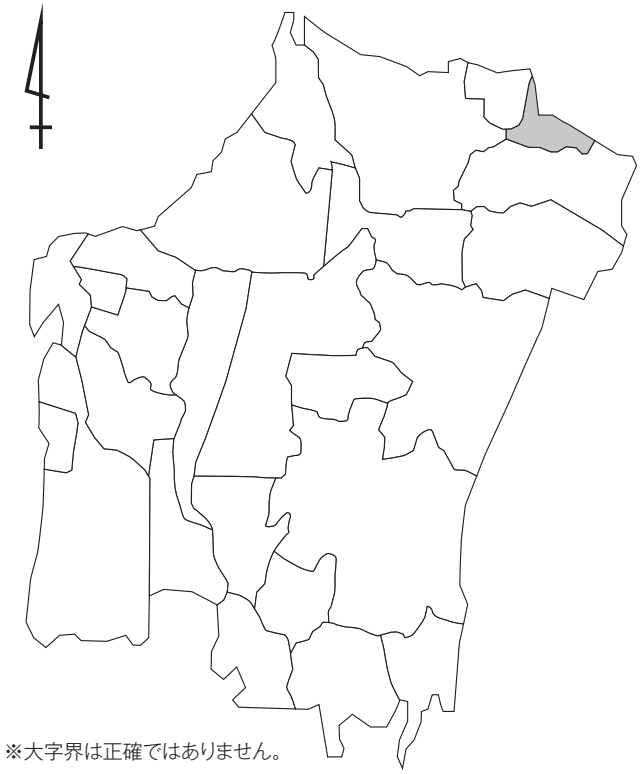
郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史　上文挟

上文挟は、鬼怒川右岸の低地に位置し、北側は宇都宮市と境を接しています。地区の東側を谷川が南流し、東側には鬼怒川が流れています。近世を通して宇都宮藩領で、当時は上文挟村と呼ばれていました。近世の集落は、現在の集落より北東にあったと言われています。文政10（1827）年には家数22戸・人数104人、天保年間（1830～1844）には家数10戸と記録されています。明治22（1889）年4月1日の町村制施行に伴い、上文挟村は上郷村・東蓼沼村・西蓼沼村・磯岡村・東汗村・西汗村・西木代村と合併して本郷村となりました。現在は41世帯137名（平成26年12月現在）の方が暮らしています。



※大字界は正確ではありません。

集落の東側には、稲荷神社が鎮座しています。創建時期については分かっていません。稲荷は、農業の神として古くから信仰されており、屋敷神としても広く祀られています。

上文挟という地名の由来は、はっきりとは分かっていません。フ（節）とハザマ（狭間）の転訛などが考えられますが、確証は得られません。また、下野市に下文挟という地名が存在しますが、両者の間に関連はないといわれています。余談となりますが、日光市と高根沢町にも文挟という地名が存在します。日光市文挟は、例幣使街道の宿場町として江戸時代に重要な役割は果たしていました。こちらの地名の由来は、日光奉行から江戸に送る信書の第一中継地点であったことに由来するといわれています。

さて、上文挟は鬼怒川低地の豊富な水資源を利用した農業地帯です。谷川に平行する木代用水は、北方の宇都宮市下桑島から取水され、田の灌漑水として利用されています。木代用水の開発は江戸時代まで遡るともいわれます。明治29（1896）年には、木代用水普通利水組合が結成されました。利水地域は、瑞穂野村（現宇都宮市）から本郷村にかけての南北約7㎞、東西100m～800mの水田地帯で、灌漑面積は186・9町、関係農家は270戸でした。鬼怒川の氾濫による取水口の変容や用水不足による畑地への転用などもありましたが、木代用水普通利水組合は上三川を代表する利水組合へと発展しました。上文挟は、豊富な水資源によって上三川きっての水田地帯として上三川の農業を支えています。

農村にたたずむ稲荷神社